

魚の序文

林芙美子

青空文庫

それだからと云つて、僕は彼女をこましやくれた女だとは思
いたくなかつた。

結婚して何日目かに「いつたい、君の年はいくつなの」と訊
いてみて愕いた事であつたが、二十三歳だと云うのに、まだ肩
上かたあげをした長閑のどかなところがあつた。

——その頃、僕達は郊外の墓場の裏に居を定めていたので、
初めの程は二人共妙に森閑とした気持ちになつて、よく幽靈
の夢か何かを見たものだ。

「ねえ、墓場と云うものは案外美しいところなのね」

朝。彼女は一坪ばかりの台所で関西風な芋粥いもがゆをつくりながら

こんな事を云った。

「結局、墓場は墓場だけのものさ、別に君の云うほどそんなに美しくもないねえ」

「随ずいぶん分あなたは白しら々としたもの云いをする人だ……そんな事云わぬものだわ」

こうして、背後から彼女の台所姿を見ていると、鼠ねずみのような気がしてならない。だが、彼女は素朴そぼくな心から時に、僕にこう云ううたをつくって見せる事があった。

帰ってみたら

誰だれも居なかつた

ひっそりした障しょうじ子を開けると

片脚かたあしの鶴つるが

一人でくるくる舞まっていた

坐すわるところがないので

私も片脚の鶴と一いっしょ緒よに

部屋へやの中を舞いながら遊あそぶのだ。

「で、まだ君は心の中が寂さびしいとでも云うのかね」

僕は心の中ではこの詩に感服していながら、ちよつとこのところところがこざかしいと云えば云える腹立たしさで、彼女をジロリと睨にらんだ。

「ううん、墓の中の提ちようちん灯んを見ていたら、ふとこんな気持ちに

なったンですよ。……別に本当の事なんか出やしないわ。だって、

こんなの、まるで河のほとりに立って何か唄うたっているようなの：
…ねえ、その気持ち判わかるでしょう」

「判らないねえ、僕はうたよみじゃないから……」

「そう、そうなの……」

本当を云えば、初め、僕は彼女を愛しているのでも何でもなかつたのだ。彼女だつて、僕と一緒になるなんぞ夢にも思わなかつたろうし、結婚の夜の彼女が、「済まないわ……」と一言漏もらした言葉があつた。どんな意味で云つたのか、僕だけの解釈では、僕以外の誰かに、済まなさを感じていたのであろう。——僕は彼女を知る前に、一人の少女を愛していた。骨格すくどが鋭く、眼めは三白さんぱく眼がんに近い。名は百合子ゆりこと云つた。歩く時は、いつも男の肩に寄

り添そつていなければ気が済まないらしく、それがこの少女の魅みりよ力ちからでもあった。

「とうとうお菊きくさんと結婚けっこんなすつたんですつてね。三吉きちさんもなかなか隅すみにおけない」

黄昏たそがれの街の途上とじょうで会った時、百合子はチラと責めるように僕を視みてこう云つたが、歩きながら、例のように百合子は肩をさし寄せて、香料こうりょうの匂においを運んで来る。だが、おかしい事には再会するまでのあの切なさも、ふと行きずりにこうして並ならんでみると、夫婦ふうふうになつてからもなお遠く離はなれて歩く菊子の方が、僕には変に新しい魅力となつて来ているのに気がつくのであった。

結婚して苔こけに湧わく水のような愛情を、僕達夫婦は言わず語らず

感じあっていたのだが、それでもまだ、長い間の習慣は抜けきらないもので、金が一銭もなくなると、彼女はおかしな風呂敷包みをつくっては墓場の道を走って行く。で、僕はひょうげて、まるで下宿屋か何かの女でも呼ぶように「お菊さアん」と窓から呼ぶのだ。すると、白く振り返った彼女は、一生懸命いっしょうけんめいに笑った顔で、「お使いよオ」と答える。

「お使いなんかいいんだ。帰っておいでよ」

「だって、あんたいちぢ苳いぢぢを食べたくないの？ それを買いに行くの……」

何か眼の中が熱くなつて来て、墓場の上に紅い粒あかつぶつぶ々がパツと散って行くほど、僕は僕の不甲斐ふがいなさを彼女に見せつけられたよ

うだ。で、僕はたまらなくなつて素足のまま墓場の道へ走つて出た。

「馬鹿ばか！ 俺おれはそんなにしてまで苺なンぞを食いたかないんだよ
ッ！ お帰り、帰つたらいいだろう……」

彼女は風呂敷包みを、まるでアンパンか何かのように子供らしく背後かくに隠して、しぶとく立っていた。そのしぶとさが余計胸の中に来ると、僕は彼女の髪かみをひきつかんで、まるで、泥魚のように、地べたに引きずつて帰つて来た。

「君が、こんな一人合点ひとりがてんをするから、前の男達も君を殴なぐつたのだらう。僕だつて、小刀の一ツも投げたくなるよ。——炭すみだわら俵わらに入いれられて、一日揚あげ板いたの下へ押し込こめられた事があつたツて君

は云つていた事があつたが、前の男の気持ちだつて、何だか僕にはだんだん解つて来たよ」

彼女は涙もこぼさないでしおれていた。風呂敷の中からメリンスの鯨帯と、結婚の時に着ていた胴抜きの長襦袢が出て来た。

「こんなもの置きに行つたつて仕方がないじゃないかッ」

ふと彼女を視ると、僕の学生時代のモスの兵児帯を探し出して締めているのだ。何だか擦つたいものが身内を走つたが、僕は故意にシンケンな表情をかまえていた。

「君が腹の満ちた恰好で、一ツのものを夫に与えるのは、それア昔の美談だよ。一ツしかなかつたら、二ツに割つて食べればい

いだろう、何もなかつたら、二人で飢えるさ」

これは、素敵にいい言葉であつた。僕は僕自身のこの言葉にひどく英雄的えいゆうてきになつたが、彼女には、それがどんなにか侘わびしくこたへたのであろう。急に、まるで河童かっぱの子のように眼のところまで両手を上げて、しくしく声をたてて泣き始めたのだ。

この泣き方は実に面白い。まるで、閨ねやを共にする男へなんぞのいろけ色気は、大おお嵐あらしの中へ吹ふき飛ばしたかのように、自分一人で涙を楽しんでいる風なのだ。子供のように、泣きながら泥どろの上を引きずられて来た汚よごれた手で、足の裏を時々ガリガリやりながら思ひ出したようにシャツクリをする。そのシャツクリの語尾ごびはまるで羊が鳴いているようにメーと聞えた。

「何だ！ 子供みたいに、もうこれから、こんな余計な算段は止めた方がいいよ、判ったかね」

僕は窓にぶらさがっている濡れタオルを彼女に取ってやって、一人窓の外の花の咲いた桐の梢を見上げた。

実に青々とした空であつた。僕は、何でもいいからつくづく働きたいと思つた。働いてこの蟹の穴のような小さな家庭を培つて行きたいと思つた。僕は急に、久し振りに履歴書をまた書きたくなつて、硯に白湯を入れ、桐の窓辺に机を寄せて、いつときタシザしてみた。うつむいてみると、美濃紙が薄く白いので、窓の外の雲の姿や桐の梢の紫の花の色まで沁みて写りそうであつた。もはや、行きつくところまで行つた風景でもある。彼女はもう

泣く事にも飽あいたのか、五月の冷々ひえびえとした畳たたみの上にうつぶせになつて、小さい赤あかあり蟻あかありを一匹びき一匹指で追つては殺していた。

「ねエ、私、お裁縫さいほうの看板でも出したいけれど……」

「へえ、君に裁縫さいほうが出来るのかね」

「大した事は出来ないけれど、袴はかまもかさねも習つたには習つたんだから……」

「だって君、習つた事と商売とは違ちがうよ——まあ、待っているさ、毎日俺も街へ出掛でかけているんだから、何とか方法はあるだろう。

——学校を出て、すぐ五六拾円にはなるだろうと思えばただ大学は出たものだよ、そうだろう……」

「ええだけど、知った人に縫ぬわしてもらった方がいいでしょう…」

「知った人ツて皆貧みなびんぼう乏ぼうじやないか」

「森本ちぬ子さんはどうでしょう。あの人は、とても羽振はぶりのいい芸術家のところへお嫁よめにいらっしつたツて云う事ですわ」

「馬鹿！ 食えなかつたら、食えないで仕方がないよ」

それより、僕は机に向つて、何か就職の口はないかと遠い友人に手紙を書いた。今となつて職業の好みもなく、また、田舎住いなかいでも幸福だと云つた意味を長々と展のべて。彼女にも安心の行くよ
うに音読してさえ聞かせてやつた。

「物事は当つて碎くだけろさ。俺達だけじゃないよ、こんな生活は山

のようにあるんだから恐れる事はないだろう」

二人は、もう畳の上に坐つて話している事が憂鬱になつたので、僕は彼女に戸締りを命じて帽子とステッキを持った。彼女は、紅色の鯨帯をくるくると流して自分の腰に結び始めた。壁の小さい柱鏡に疲れた僕の顔と、頬のふくれた彼女の顔が並んだ。僕は沁々とした気持ちで彼女の抜き衿を女学生のように詰めさせてやった。

戸締りをして戸外へ出ると、二人は云いあわしたように胸を拡げて息をしながら、青麦のそろつた畑道を歩いた。秋になると、この道は落葉で判らなくなる道であつた。いつか、まだ独身者であつた時の百合子との散歩を僕はふと考えたものであつたが、僕

の後からゆつくり歩いて来ている彼女は、紙かみ雛びなのように両りよう袖でを胸に合わせて眼を細めて空を見ているではないか。――

「二人位並んで歩けるよ、さあおいで」

それでも、彼女はまるで隣りんじん人同士のようえんりよに遠慮してしまつて、なかなか歩を揃そろえようとはしなかつた。

「いいねえ。ほら雲雀ひばりが啼ないているよ」

「……………」

「どうしたんだい？」

「私、馬鹿なんでしょうが、風景けしきがちつとも眼はに這はい入らないで、今だに一生懸命で戸締りをしているようなの、私時々体が二ツにも三ツにも別れて勝手な事しているんですよ」

「君が、僕の背中ばかり見ているからさ、さア、先になつて行つてごらん、厭いやでも美しい景色が見えるから……」

彼女を先へ歩かせると、今度は僕の方がたまらなかつた。赤緒あかおの下駄げたと云えば、馬糞ばふんのようにチビた奴やつをはいている。だが、雑ぞ巾うきんをよくあててあるらしく古びた割合に木目が透すきとおつていた。

「唄でもうたわない？」

「ええ……唱歌なんてものが皆忘れてしまった……こんな時唄う歌なんてむずかしいわねえ」

僕達おがわは小川の上のやや丘おかになつた灌木かんぼくの下に足を投げ出して二人が知っている「古里」の唄をうたい始めた。

雲雀が高く上っている。若葉が風にまるでほどけて行くようであつた。僕は眠ねむたくなつて、ゴロリと横になると、帽子を顔にかぶせて眼をとじた。瞼まぶたの部屋の中は真ま暗くらだが、渦うずのような七色のものがくるくる舞っている。僕のそばから離れて行つたのか、彼女が柔やわらかい草を踏ふんで向うへ遠ざかるのが頭へ響ひびいて来た。

「オイ、あんまり遠くに行つちやア駄だ目めだよ」

帽子の中からそう云つたまましばらく、僕はうたたねしてしまつたらしい。——ふと眼が覚さめると彼女は、遠くの合ねむ歡むの花の下で、紅の帯をといて、小川の水で顔や手足を洗っていた。

遠くから見ていると、その姿がまるで子守女のように見える。

長い間、帽子の下で眼をとじていたせいか、起きあがった時は

夕方のように四圍あたりが薄暗いものに見えた。僕は袂たもとの底から、くしやくしやになつた煙草たばこを一本出して火を点じた。さわやかな初夏の憶おもいが風になつて僕の袂をふくらます。

合歡の木の下の彼女は、やがて帯を結んで堤つつみへ上つて来た。

「何だいその白い風呂敷は……」

彼女は癖くせのように、その風呂敷を背中に隠して、ニヤニヤ笑いながら「摘草つみくさしたのよ」と云つた。

あんまり食べられそうな草がたくさんあるからと云うのだ。彼女の拵おしろいげた風呂敷の中には、ひずるやたんぽぽや、すいばのようなものまで這入っている。白い風呂敷と思つたのは、彼女のさらしの襦袢なのであつた。「だから、僕は安心して貧乏が出来るん

だね」とも口に出して云いたいほど、彼女は二十三歳にしては、ひどく世しよたい帯くさいのだ。

夜は、これらの摘草を茹ゆでて食卓しよくたくに並べた。色は水々しかつたが、筋が齒にからんで、ひずるの噛み工くあい合などはまるで蕪こんにやくのようであつた。

墓場の向うの火葬場かそうばには、相変わらず毎日人を焼く煙けむりがもくもくと埃色ほこりに空に舞いあがっている。——僕はもう職業を求めめるために街へ出たり、履歴書など書く事は徒労だと思ひ始めた。僕が頭を下げて行つた先々の人間達は、いわゆるフオイエルバッハの大だ邸宅いでいたくと名づけられるような、中では茅屋ぼうおくにある場合と違つた

考えを人達はしているものだ、で、全くもつてムザンでありすぎる。——朝眼覚めて口を洗い、ゴロリと横になって、人を焼く煙を眺^{なが}めている僕のかたわらに、おぼつかない手付でもつて縫いものをしてている彼女がいる。髪の毛には網^{あみ}のように白い埃^{たま}が溜^たまっていて、それを眼にした僕の口の中には、何か火の玉をくくんだように切ないものがあつた。

彼女はきつと「私、いい縫物屋を知っていますから頼^{たの}んであげましょう」とでも云つて、この着物の仕事を森本ちぬ子から取つて来たのに違いない。

「ねえ、この間平井さんの奥^{おく}さんに会ったら、早くちぬ子さんに着物を返した方がいいわ、縫物屋へ持つて行くツて云つて、菊さ

んは質屋へ置いてしまつて、とても困つてるツて云いふらしてるのよ、なんて教えて下さ^{くだ}つたんだけど、まさか、こんな洗い曬^{さら}した着物五拾銭も借さないでしようのに、私とても淋^{さび}しくなつてしまつた」

僕は沈黙^{だま}つていた。彼女がその着物をちぬ子の家から持つて来てもはや十日あまりにもなるのだが、一心になつて毎日こつこつ縫つている彼女に向つて、何を僕が咎^{とが}めだてする事が出来るだろう。

「でも、もうこれで出来上つたのだから、持つて行こう……」
彼女は、出来上つた着物を畳^{たた}んで座蒲団^{ざぶとん}の下に敷^しいた。

「出来上つたンなら早く持つておいで、友情のない奴の品物なソ

ぞ見るのも不愉快だ」

僕は一々彼女に向つてああしては悪い、こうしては悪いなどと云う事に草臥れ始め、自分のキリキリした神経もこの頃では少しばかり持てあまし気味でいるのだ。

履歴書も四五十通以上は書いたろう、あらゆる友人を頼つて迷惑な手紙も随分書いたが、頼んだ友人達自身が何等の職もなく弱つてゐる者が多かつた。

彼女は着物を風呂敷に包むと、悪戯ツ子らしく眼をクルクルさせて僕の両手を引っぱり、台所へ連れて行くのだ。「ねえ、私ちぬ子さんにいいお土産を持つて行こうと思うのよ」そう云つて彼女が台所の流し場を指差したのを見ると、西洋種の紅い豆の花

や、束たばの大きい矢車草がぞつぷりと水につけられていた。

「おお綺麗きれいだなア……」

「綺麗でしよう……」

「どうしたンだい、こんなゼイタクな花束を？」

「ううん……新墓へ行って盗とつて来ちやったのよ。私、もつたい
ないと思うたわよ。だって随分あるの、お金持ちのお墓なんて十
円位も花束があがつてよ……」

「で、お土産に利用するのかい、仏も浮うかべないねえ……」

「だって美しい花だものほしいわ」

彼女は、その花束を如何にも花屋から買ったかのように紙に包
んで、風呂敷をかかえ日向ひなたの道へ小犬のように出て行った。

僕は起きあがって窓ツプちへ腰を掛けて墓の道を眺めた。墓を
囲んだ杉すぎや榎えのきが燃えるような芽を出している。僕にはなぜか苦し
すぎる風景であつた。夜が待ち遠しい位だ。早く夜になつてくれ
るといい。部屋の中に空箱あきばこのように風が沁みて行つたが、生き
ている喜びも何も感じられないほど、すべてが貧弱なもので、二
畳じょうと八畳じょうきりの座敷の中には、この僕一人が道具らしい存在だ。
歪ゆがんだ机の上には、訳しかけのプウシユキンの射的そうこうの草稿そうこうが黄
いろくなつたままだが、もうこんなものも売りに歩く自信もなく
なりかけた。僕はふと誰かの話を憶い出した。バルザックのプチ
イ・ブルジョアを半年かけて訳して、六百枚あまりが百円にもな
らなかつたと云う侘しさを。半年の情熱をかたむけて訳したその

人の気持ちはこれまた侘しすぎる以上だろう。

——僕は一二年前の大学生活の中に、かつて一度も生活の不安を感じた事はなかったはずだったが、いや、生活の事を考えるのが恐ろしかったのかも知れない、薄暗い珈琲店コーヒーの片隅で考える事は愚にもつかない外遊の空想などばかりであった。

僕はまた、壁の帽子をかぶって、彼女の厭がるステッキを持った。墓の中の散歩をこころみるべく、僕もまた彼女の去った墓の道へ出てみた。熱ばんでたまらないと云った風に、雀すずめ達が、ころこ地べたを転がるように飛んでいる。なるほど、彼女が云ったように、新墓には草のように花がそなえてあった。もう萎なえかけ

たのなどもある。三十歳、十五歳、十九歳、皆、若い仏達であつた。その中で一ツ僕の眼をとらえた紀意大善姉と書いてある墓標があつた。墓標の裏には、レニエエか何かの「浮世うきよには思い出もあらず」と記してあつたが、この言葉は今の僕の心をひどく温めてくれるものがあつた。二十八歳としてあるが、どんな女性だつたのだろうか……僕と同じ年ねんれい齡で亡くなつた、この新墓の主の墓標の言葉に、僕は全く口くちぶえ笛さえ吹きたくなつたほど気持ちさが軽くなつた。

「浮世には思い出もあらず」何とすがすがしく云い放つたものであろう。灰色の墓原の向うにこの僕の心に合わせて、誰か口笛を吹いて通る者がある。

帽子の釘くぎに一緒にぶらさげた電氣に灯がはいると、彼女は風呂敷を米で針坊主はりぼうずのようにふくらまして帰つて来た。

「五拾錢もら貰つて来たのよ。ちぬ子さんたらあんまり上手じょうずじゃないわねえツて云うの」

「あいツ、お前の縫つた着物を着たら体が腫はれあがつて来るだろうさ、——とところで、今日墓きようの中なかでいい言葉をみつけて来たよ」

「どんな言葉？」

「いいや、別にあらたまるほどじゃないが、明日、またどツかへ花を持って行くところはないかね。グラジオラスやチウリップがたくさんあつたよ、その墓の主なら咎めだてはしないだろう——」

『浮世には思い出もあらず』と書いてあつたのさ」

「浮世には思い出もあらず、変に氣取つた奴ね、私だつたら『うらめしい』と書いてもらうわ」

「ええツ、うらめしいか、なるほどねえ」

こましやくれた奴だ。彼女は米さえ買つて来ると唱歌が上手になる。一坪の厨くりやは活氣ていを呈いして鰯いわしを焼く匂いが僕の生唾なまつばを誘さそつた。

たつた五十錢の収入で驚おどろくべき生活のヒヤクだ。僕もあわただしく机へ向つた。今は黄いろくなくなつて古びたりと云えど、プウシユキンの訳に手を入れてみるべきだ。彼女は十日かかつて五十錢の収入を得て来ている。そうして彼女の唱歌は実に可憐かれんだ。――

僕は膝ひざを正して字引を繰くったが、字引の冷たさは、僕をまた白々しいものにする。字引を売つて、魚に変えた方がましだ。鰯いわしの匂においは、懐なつかしい匂においであつた。

「さア食べましょう。実に久し振りに、実に実に……私アーメンと云いたくなるわ。あなたのよく云う食べるだけなのかい人間つて奴はツて云うのを止めましょう。さあいらつしやいよ」

玄げん関かんの食卓には、墓場から盗つて来たのであろう桃色ももいろの芍しやく薬やくが一輪コップに差してあつた。二人は夢むちゆう中で食べた。実に美しくつつましい食しよくよく慾よくである。彼女は犬のように満ちたりた眼まなこをしている。

「今日はねえ、帰りにまた平井さんのところへ寄つたの、あなた

夜番ツて職業厭かしら」

「夜番？」

「ええ夜番なのよ」

「夜番ツて？」

「とてもお金持ちのお邸やしきですつて、女ばかりなんで書生さんが欲しいんだとかで、平井さんが、三吉君どうだろうツて云うのよ。

食べて三十円ツて、ちよつといいと思つたから……」

「二人で行けるのかい？」

「そこまで聞かなかつたわ、……本当ねえ」

「何だ、それじゃアつまらないじゃないか、……俺は何だつてするよ。もうこうなつたら、机の前にタンザしている気持ちなんか

ないんだから」

彼女は口いっぱい飯を頬ばったまま引っこみのつかないような顔で、大粒な涙をこぼし始めた。実際、広い屋根屋根の下にはこうした人生の片言があつちにもこつちにもあるのだろう。

「それで、三十円くれると云うのは本当の事なのかね？」

飯を頬ばっているので、彼女はコツクリをしてみせる。

僕は字引を街で金に替^かえて、平井の紹^{しょう}介^{かい}状^{じょう}を懐^{ふところ}に、その

郊外の邸へ行ってみた。武者窓でもつけたら、侍^{さむらい}が出て来^きそうな、

古風な土塀^{どべい}をめぐらした大邸宅で、邸を囲^{さつ}んで爽々^{さつさつ}たる大樹が

繁^{しげ}つていた。ピアノの音が流れて来る。もうそれだけでも、変に

臆^{おくびよう}病^{びょう}になつてしまつて僕は何度か大名風^{だいみょうふう}な門前を行つた

り来たりしたが、ふとまた「浮世には思い出もあらず」の言葉に、急に血潮が熱くなるような思いで、僕は足音高く案内を乞うた。

出て来たのは十六七ばかりの桃割れの少女であつたが変につんつるてんな着物を着ている。僕はまず応接間に通され、ここで約一時間位も待たされた。——ユトリオ張りの油絵が一枚、なげしに朱い槍一本、六角型の窓の向うには、水の止まつている大きな噴水があつた。その噴水のまわりには、薊の花が叢のように咲いていた。

「素敵だなア！」何となく感歎してしまえる静寂であつた。やがて、僕は未亡人だと云うこの家の主の部屋へ案内されたのだが、いったい女中が何人居るのか僕はまるでリレーのように次か

ら次の女中へと渡わたされて、夫人の部屋の外まで来た時は、逃にげ出したいほど、何かもやもやした気味わるさを感じた。夫人は、二人の看護婦に寄り添われて、厚いむらさきの蒲団のうえに坐つていた。

「山田は、信州の生れだそうですね」

僕は一も二もなく参つてしまった。夫人も信州の生れだと云うので、ここでは、信州の山の話が出た。

「今日は部屋をずっと見て廻まわつて、なるべく早く来るようにして下さい」

給料の話と、妻の話を持ち出そうとすると、もう看護婦が会釈するのだ。——お伽ときばなし話にだってこの様な大名生活はないだろ

う。彼女に見せてやったなら、どんな事を云うであろうか。老女中が次々と五十幾ツかの部屋を見せてくれた。十九歳を頭に令嬢ようじょうが四人、女中が十八人、事務員が二人の全く女ばかりの大世帯で、男と云えば風呂焚たきの爺じいさんと末の坊ぼっちゃんだけだと云う事であつた。

この二ノ宮と云うのは、天下の二ノ宮と云われた生糸きいと商人で、一時は全く旭きよくじつ日の勢いにあつたと云う一家だと云う事だ。さすがに、風格も堂々としていて、五十幾ツかの部屋を見終つた時の僕の頭の中には、ただ壁だけがぐるぐる廻つていた。

老女中は、僕を玄関へ送り出すと、「お荷物を早くお送りなさいまし、女手が多いのですから片づけといて上げます」僕は僕の

部屋になるのだと云う書生部屋もさつき見た。高窓が一ツに壁上には、判読するに困難な字が掛けてあつた。あの洗い流したように古びた畳の色など、僕にはもう縁なき衆生であるかも知れぬ。

「前にいた書生さんは、この高窓からばかりカチカチカチなうて拍子木を打つんでしよう、そりやアおかしい人でしたよ。自分こわが恐いんで近所の野良犬のらいぬを五六匹も集めたりしていたんです……」

僕は、無意味な壁ばかりを見て歩いた事をひどく後悔こうかいした。人の住まわっていない無数の壁を警護するために、彼女と離れて別

れてまで暮す心はない。では、どうして食って行くのだ。「浮世には思い出もあらず」また墓標の裏の言葉が胸を突いて出た。――我々置き去りにされたインテリはいつたいどうすればいいのだ。人生はまるで今日見たあの壁の中みたいじゃないか、あつちを向いても、こつちを向いても、壁々、壁だ、壁なのだ。

いつたいどうしろと云うのだ。

「もしもし終点でございますよ」眼だけが空洞のように呆んやりみひらいている僕の肩を叩いて車掌が気味悪そうに云った。今までに、青年らしい楽しみも希望も随分考えて来たが、僕の青春には、ただ「浮世には思い出もあらず」と云う言葉だけが残っただけだ。

彼女は灯もつけずに庭にいた。

「みみずを掘ほっているの……」

手には空あき罐かんをさげて、黒い土をほじくっていた。みみずは百
匆もんめ掘れば、いくらになるとか、またどこかで聞いて来たのだろう。

僕は部屋へ這入って電気をつけた。机の上には、何かまた彼女の落書が書いてある。「一、魚の序文。二、魚は食べたし金はなし。三、魚は愛するものに非あらず食するものなり。四、めじまぐろ、鯖さば、鰈かれい、いしもち、小鯛こだい。」

彼女は猫ねこのように魚の好きな女であった。どんな小骨の多い魚でも、身のあるところをけつして逃のがさなかつた。——僕は字引を金に替えた奴の残りを袂の底に探ってみた。まだ五十銭も残って

いた。この金を、どうして楽しませてやったらいいだろう。

「おい、みみずは取れたかい？」

「まだまだ、今朝けさからなんだけど、たった四匹よウ。めめず屋のお父おじさんの話ではねえ、ここは昔沼ぬまだったんだからたくさんめめずが居るって云うンだけど、なかなか居ないわア」

「いくらになるンだい？」

「十八錢よオ……」

「おい、十日で十八錢じゃないのかい？」

「着物縫うより、こちらがよっぽどいいわ。土の匂いつてちよつといいわよ。……待っていらつしやい。今手を洗って行くから……」

……」

彼女が手を洗つて来ると、僕は茶ぶ台の上に五拾錢玉一ツと五錢玉一ツを並べた。

「まあ！ お腹空すいてんだからあんまりおどかさないでよ」

それでも嬉うれしそうであつた。彼女は急にせわしそうに、台所に立つて行くと、馬穴バケツをさげて井戸端いどばたへ水を汲くみに出た。茶ぶ台に置かれた空罐の中には、四匹のみみずが、青く伸のびたり紅く縮まつたりしている。

夜。

雨が降りだしたのか、窓の外の桐の葉がザワザワ鳴っている。彼女は机もたに凭もたれて何か書いている。

「そいでね、その二ノ宮ツて家は、まるで壁ばかりなんだよ。君だつたら何と云うかなア、庭ときたら手入れは行きとどいていゝるが、まるで廃園はいえんさ、君だつたら大根植えるといいと云い出すかも知れないね。だが、あんな壁ばかりじゃアやりきれないよ。空一ツ満足に見えないんだからねえ暗くて……」

「空の見える気持ちだが、そんな人達、誰かに覗かれるようでこわいんでしょうねえ」

「でも、なかなか堂々たる邸だよ、大きい樹に囲まれていて、ピアノの音がして……」

「ちつともうらやましくないわ」

「うん、ちつともうらやましくないさ」

彼女はもう平然と僕の兵児帯を締めている。初めの頃のおどおどした気持ちも抜けてもうこの頃では、まるで十四五の娘むすめのように、朗らかであった。

「だけど、俺達は乞食こじきのようにお腕わんを一生持つて暮らさなきやならない理由ツてないよ」

「それやアそうよ。だけど、ねえ、捨石になれる悟りさとでも開かん事には、やっぱり、一生お腕の口かも知れないもの」

雨が時々、障子しおに汐しおのようにしぶいて来る。僕は墓場の言葉を憶い出していた。

彼女は、子供のように、河のほとりで唄うような気持ちだと云うあの淋し気な声で、「一、魚の序文。二、魚は食べたし金は無

し。三、魚は愛するものに非ず食するものなり……」と音読する
のであった。

(昭和八年四月)

青空文庫情報

底本：「ちくま日本文学全集 林芙美子」筑摩書房

1992（平成4）年12月18日第1刷発行

底本の親本：「現代日本文学大系69」筑摩書房

1969（昭和44）年

入力：土屋隆

校正：林幸雄

2006年9月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

w.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

魚の序文

林芙美子

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>